

ー 第7話 続々・私説「岡田隆介」論 ー

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

どうも、3ヶ月のご無沙汰でした。宮井です。私説「岡田隆介」論の三回目です。前回は、毎度ご紹介しています、明石書店出版の「そだちと臨床」誌の第4号の対談企画の記事を活用させてもらい、岡田さんの臨床におけるメタファー力の圧倒的な展開みたいなものを紹介させてもらいました。当時、私自身はこの雑誌の編集委員でしたから、この企画にも携わっていたわけですが、当日はこの懇談というか対談には参加してません。この記事の取りまとめである編集委員の菅野道英さん、懇談会の参加者であり、編集委員でもある大島剛さん、そして参加者の相坂聖子さん、井出智博さん、辻亨さん、中濱美起さん、何より事例提出者である大内雅子さんには、「岡田隆介」論を書く発想をいただいたことを、紙面を借りてお礼を伝えたいと思います。なんか乗っけから、終了モードに入っていますが、まだまだこれから、今回に繋いでいきたいと思います。

さて、反響があろうがなかろうが、好きなことを書かせてもらっているのはありがた

いことです。その数少ない反響のなかで、この連載を読まれて「岡田愛に満ちている」「愛がだだ漏れ」「岡田さんへのラブレター」といった感想をいただいています。自分でも読み返してみて確かにと頷ける感想です。しかしながら、書いている本人はほんとに今までの自分の面接に、岡田さんの指南する教えやスキルといったものが役立ってきたから書いているという意識が強いのです。単なるお世辞では書かない、書けないでしょう。これは強いて言うなら、ここ何年、何十年という単位で、いろんなアプローチや〇〇療法といったものが輸入され、臨床の現場で消費されてきていますが、ほんとに役にたつものなんてほんの一握りしかないということだと思うのです。大切なものは、鍛えられ、削ぎ落とされ、あるいは付け加えられ、その根幹には大きな改変はなく、あなたの身近にあるのだということを伝えたくて、このシリーズを書いていることに、気づきました。

1.理論編

岡田さんの教えは何処から来ているのか？岡田さんの治療理論は何処にあるのか？岡田さんの対人支援の拠り所は何なのか？そうしたことを書かれた資料や、聞いたこと、推測（妄想を含む）を交えて論考したいと思います。第一に、岡田さんの口からこの人に影響を受けたとか、自分の治療的な理論ベースは何々にあるとかはほとんど聞いた記憶がありません。例外的に、盟友（何度も勝手にお二人の関係をこのように規定してはありますが、もちろん、お二人の口から直接聞いたわけではありません。でも、たぶん、そうでしょう）の団士郎さんの話題は、私と会話していてもよく出ますが、団さんに倣ってとか、団さんを真似てという言い回しはほとんど聞かれません。お二人とも、家族療法という括りの中で、システム論を認識の中心に置きながら、児童福祉領域の一時代を牽引してきた、これは客観的な事実でしょう。でも、そうした中であっても、岡田さんの場合は、ことさらシステム論に言及して熱く語るという感じも印象としてありません。そう、なにか熱く語るということが、むしろ恥ずかしいというスタイルが岡田さんなのです。「〇〇先生から強く影響を受けた」「〇〇療法の岡田です」なんて口が裂けても言わない。業界カタカナ用語や、世間的なブームから絶妙に距離を置く。「オレ流」ですか。この言葉も恥ずかしいと言うと思います。つまり、その裏には、オリジナリティへのこだわりがあり、それは、それぞれのクライアントや家族には、オーダーメイドの治療が必要なのだという理念があるからだと思います。

① アドラー心理学

では、理論なき孤高の児童青年精神科医、岡田隆介なのか。そんなことはない。流行りを疑い、一歩距離を置く中で、実はきちんと知識として習得されているものと思います。その中から自身の実践にかなう理論を取り入れての現在の岡田理論だと思います。まず何からか。アドラーでしょう。私も一時期ハマったことがあるので、岡田さんがアドラーからいろいろともってきていることは、岡田さんの講演や、著書を少し見たり読んだりただけですぐ分かりました。アドラー自身は言わずもがなの有名人でこの業界の人なら誰しも名前は知っている人です。でも、岡田さんが、直接影響を受けたのは、もうお亡くなりになられたけれど、同業者の精神科医野田俊策さんだと思います。岡田さんが直接に会って話をしたとか、野田さんと呼んで勉強会をしたとかいったことを聞いたことがあります（あくまで私の記憶の中の話ですが）。岡田さんの「こんなときどう言う？（家庭教育編）」の中に、思春期との付き合いで、母親に相手のためを思ってではなく、自分のためを思って立ち位置のシフトダウンを勧めるスキルの一コマがあるのですが、まさにアドラー的介入だと思います。

② システム論-家族療法

システムを見ずして家族療法はないわけですが、原因が結果であり、結果が原因であると考えような決めつけすらない立ち位置が岡田さんには感じられます。家族が後生大事に一張羅（昭和表現ですね）の風呂敷に包んで持ち込んだ問題を、そっと、あるいは、さっと岡田さんに開陳するわけです。ド

やってかんじ。困っておられるわけですが。岡田さんは、ほうっと深いため息か、感嘆の吐息かは文脈によるのでしょうか、じっと見つめ「果たして、これ、問題でしょうか？」と言。問題は問題と規定するところに、問題として立ち現れる。システム論の大原則ですね(誰が言った??)。ここから、別のシナリオがスタートする訳ですが、こうした循環的巻き戻しが岡田さんをしてすごくワクワクさせるのではないかと思います。個人でも家族でも構わないけど、予定調和の結論に対して、正面切って異議を唱えるのではなく、ちょっと以前の古畑任三郎よろしく眉間に皺を寄せ疑義を呈する演者でありたいのではないのかなと、岡田さんよろしくメタファーで語ってみました。そう、家族の前で演じるのに、この上ない喜びを感じられてきたのではなかろうか、それで家族療法。そう言えば、岡田さんのワークショップ嫌いは都度に有名です。これは、人前に出るのが嫌いということではなく、ワークショップの中で参加者にグループワークをさせて相互交流させることより、自分が一方的にしゃべることが好きだからだと思います。自分のシナリオで演じる、演じてもらうのも自分のシナリオ。「家族」という単位が、一番じっくりくる劇場ではないのかななんてね。たぶん、大人数の講演より、少人数の分科会を好むのも案外そんなところに理由がある気がします。

③ 解決志向

この心理療法は、私自身が長年お世話になっている立ち位置です。問題を、あるいは問題の原因を探し求め、突き詰めていくより、問題とは別の「資源(リソース)」「強み

(ストレングス)」「例外(問題が起こりそうで起こらなかった状況など)」こと、ひっくり返して「解決」と名付けますが、そこに焦点を当てることを目指しましょうというものです。もちろん問題を蔑ろにするわけではなく、問題は問題として受け取ります。でもそれ以外にも存在する解決の方にも目を向けてもらいましょうということです。目を向けろと言われてもいきなりは無理です。そりゃそうですわね、問題があるから相談に来たのだから。従って聴く側(セラピスト、支援者)のインタビュー力、質問の仕方が問われます。解決を聴くことで、問題は在りながらも、何とかやっていけるわと聴く側(クライアント、要支援者)に自信を持ってもらえたらしめたものです。また、「解決=変化」が大きくなることで相対的に「問題」が小さくなったり、時には消えたり(忘れる)することも起こります。更に良きことは、自分の中に在ったり、自分に紐づけられるのが「解決」ですから、自信が芽生えることや、自己肯定感が上ることも予想されます。うまく運ばば、目の前のセラピストのお陰でなんとかなりましたという気持ちより、自分自身で何とかここまで来られた、これからいろいろと「問題」はあるだろうが、なんとかやっていけそうと思ってもらえるようです。うまくいってもセラピストはそう感謝されないというのは、セラピストにはどうよ!?という感じですが、私自身はクライアントがうまく生きていってくれたらそれでいいという考えですので、この立ち位置とは長いお付き合いをしています。

こういった私自身馴染みの深い解決志向ですが、岡田さんも自分の治療レパートリーの中に取り込んでおられます。それは以

前紹介したパワポのデータ（図 1）の中に
取りあげられています。解決志向＝ソリュー
ーション・フォーカスト・ブリーフセラピー
の質問の中核をなすスケーリングという尋
ね方ですね。それもけっこう応用編の尋ね
方だと思うわけですが、岡田さんはさらっ
と使いこなしているのが憎いです。一切解
決志向と言ってないのが、ズルいです。

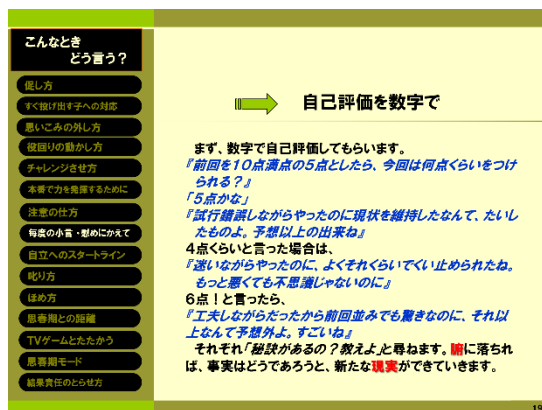
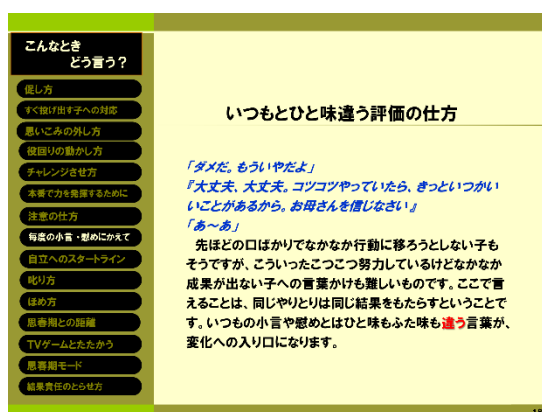


図1 「こんなときどう言う? 家庭教育編」
より 岡田隆介作成

④その他、ナラティブ、オープンダイアローグ

岡田さんは、新しもん好きです、たぶん。
これも推測の域はでませんが、だいたい世
の中に流行っていること、この業界で流行

っていることについてチェックしている感
じです。たまに直接会って、いつもの馬鹿話
に興じる時もこちらの振った話題について
「それは、ちょっとわからん。」「おれ、知ら
んわ。」「それには興味ない。」といった言葉
を聞いた記憶はありません。ただ、知識をひ
けらかすのが死ぬほど嫌な人だと思います
ので、我さきに話題を放り込んでくること
はない。こういうと奥ゆかしい方というイ
メージですが、こういうたえどうでしょ
うね。定期試験当日の中学生の会話で
Aくん「昨日、寝てしもた。全然、準備で
きてへん! どうしょう、岡田はどう
なん」

岡田くん「俺なんて、今日試験いうのも知ら
へんかった。今聞いて知ったわ。」

Aくん「そら、ひどいな。大丈夫か、岡田」
と言いながら、内心ほっとするAくん。で
も岡田くんはけっこう良い点数を取って
いたりします。ディスってるのとちゃいま
すよ。これも岡田さんの一面であると思
います。「勉強してるのにしてない」＝「知識欲
は一倍つよいのにそれをひけらかすのは流
儀ではない」姿勢ということです。ナラティ
ブ・セラピーが非常に脚光をあびた時、話を
したことがあります。岡田さんは、その素晴
らしさを認めつつも「おれには合わんかな」
と漏らした一言をよく覚えています。実は、
その時、その言葉に私は違和感なかったの
も同時に覚えています。岡田さんは、演出家
なんだと思います。落とし所は自分で描き
たい。ある程度の着地点は自分で提供した
い。ナラティブ・セラピーの専門の方から
は、間違った理解だとお叱り覚悟で言えば、
セラピーの場を一緒に作り出していくナラ
ティブより、自分の台本のもと演出もして、

もちろん自分も出演して、クライアントが気に入る(驚かすことも含めて)ナラティブを受け取ってもらいたがっているように思います。ここまでくると私の岡田さんの流儀に対する妄想ですけども。全面的には信じてないでね。既読号で書きましたが、岡田さんの立ち位置は、「料理人」であり、「ティラー(仕立屋)」「舞台作家兼演出家兼役者」であるのです。オープンダイアログについても、勉強してないと言いながら、がつつりしていると思います。また、間違った認識ならごめんなさいですが、自分(セラピスト)と相手(クライアント)との立場すら取っ払ってしまうODも、ナラティブの時と同様の理由で岡田さんの肌には合わないかと思っています。今度、会った時間聞いてみます。岡田さんにとっての臨床というか人生の基本は、「おもてなし」=ホスピタリティにあるのですね。だから自分の意に沿わないことは決してやらないわけです。これが、一面めんどくさい男でもある理由ですね。

2. 最後に

今回で私説「岡田隆介」論は終わりにしようと考えて書き始めたのですが、ここで終わると、理系で、知識欲旺盛で、お笑い好きで、クライアント思いで、シャイでおもてなし好きのイケオジと勘違いされる方もかなり多数に上るかもしれません。それもよいのですが、私の妄想も含め、さらに番外編として次回は「人間・岡田隆介」に激しく迫りたいと思います。だから、次続くののでよろしくお願いします。

家族が変わる子育てが変わる コミュニケーション のヒント

子どもの生きる力を育てる

岡田隆介

Kazuo Okada



岡田隆介

※ちよくちよくパワポのスライドとして文章内に登場する「こんなときどう言う? 家庭教育編」を本にまとめたものが**上記の本**です。私の文章を読むより、岡田さんの教えや知恵がわかりますので、Amazonでポチってお読みください!!